日本医師会雑誌　第155巻・第7号　2026年10月1日発行（毎月1日発行）　1948年4月24日第3種郵便物認可　ISSN 0021-4493

日本医師会雑誌

2026 10
THE JOURNAL OF THE JAPAN MEDICAL ASSOCIATION
第155巻・第7号

特集

糖尿病治療はどこまで進んだのか
―健康長寿のための最新治療戦略

企画・監修／横手幸太郎・竹本　稔

連載

- 各科臨床のトピックス
- 主訴から紐解く精神症候学
- 医療DX
- AIの医学・臨床への応用

日本医師会
https://www.med.or.jp/

巻頭言　糖尿病診療の新たな地平

近年，DPP-4 阻害薬，SGLT2 阻害薬，GLP-1 受容体作動薬をはじめとする新規薬剤の登場に加え，持続グルコースモニタリング（CGM）の普及，1 型糖尿病に対する自動インスリン注入（AID）システムの実用化，さらに personal health record（PHR）をはじめとするデジタルヘルスの発展により，糖尿病診療は大きな変革を遂げている．その結果，診療の目標は血糖値の改善だけでなく，健康寿命と生活の質（QOL）の維持・向上へと広がり，糖尿病診療は患者ひとりひとりの人生に寄り添う医療へと発展しつつある．

このような診療の進歩を支えているのは，新規薬剤や医療機器の開発だけではない．食事療法は現在も治療の根幹であり，その実践も一律の制限を重視する指導から，患者の病態やライフステージ，価値観を踏まえた柔軟な支援へと進化している．肥満を伴う発症早期の糖尿病では寛解を目指す治療戦略が現実のものとなりつつあり，高齢者糖尿病ではフレイルやサルコペニアを見据えた栄養・運動管理がますます重要となっている．また，病態に基づくクラスター分類の提唱などを契機として，さらなる個別化医療への期待も高まっている．さらに，薬物療法の進歩により，糖尿病に起因する心血管疾患や慢性腎臓病（CKD）の発症・進展が抑制されつつある一方，高齢化を背景として，がんや感染症への対策など新たな課題も顕在化してきた．加えて，糖尿病に対するスティグマの解消やアドボカシーを通じた社会的支援の充実も，これからの糖尿病診療を考えるうえで欠かせない視点である．

本特集では，このような糖尿病診療の新たな潮流を俯瞰し，最新のエビデンスをいかに日常診療へ生かすかという視点から，各分野の第一人者にご執筆いただいた．本特集が，日常診療に携わる先生方にとって，糖尿病診療の現在地を見つめ直し，ひとりひとりの患者に最適な医療を実践するための一助となれば幸いである．

竹本　稔
国際医療福祉大学医学部糖尿病・代謝・内分泌内科学 教授（代表）

横手幸太郎
千葉大学 学長